帰脾湯

出　典　『聖済総録』、『厳氏済生方』、『玉機微義』、『薛氏医案』

主　効　消化吸収改善、精神安定、止血。
脾胃気虚症状と心血虚症状の併存しているときの薬。

組　成

人参３　白朮３　茯苓３　竜眼肉３　酸棗仁３　黄耆２～３
遠志１～２　当帰２　木香１　甘草１　生姜１　大棗１～２

四君子湯	人参　白朮　茯苓　甘草　生姜　大棗
	黄耆　当帰　竜眼肉　酸棗仁　遠志　木香

解　説

本方は四君子湯（464 頁）を基本にした加味方で、四君子湯加黄耆・当帰・竜眼肉・酸棗仁・遠志・木香である。

【四君子湯】…衰弱した脾胃の消化吸収や蠕動・緊張などの低下を回復し、補脾健胃することにより精神的にも安定させ、全身の新陳代謝を活発にする薬であり、気虚の基本処方である。

【黄耆】…代表的な固表薬であり、補気薬である。普段から皮膚の抵抗力が弱く、また汗腺機能も低下していて自汗を来たし易い衛気の虚の状態に対して皮膚の機能を強化する。また、慢性化した皮膚潰瘍を治癒に導く。更には全身の慢性衰弱状態に対しても、新陳代謝を活発にし、全身の筋肉の緊張を強化する。一方、全身の浮腫に対しては利尿によって消腫するが、腎炎に対して蛋白尿を軽減し、全身状態を改善する作用も認められている。

【当帰】…婦人科の主薬で、月経の調整や疼痛に対して効果がある他、打撲・捻挫・虚寒・瘀血や慢性炎症、慢性化膿症などによる血流の停滞を解除して、気血の循行を改善し、更には中枢神経の様々な不快症状を鎮静する効果もある。

【竜眼肉】…神経過敏症状による不眠・易覚醒・易驚愕・動悸などを鎮静して精神安定を図る。また、補脾健胃作用も認めうる。『薬性提要』には、

「脾を益し、血を養い、心を補う」とある。

【酸棗仁】…全身疲労時の不眠に対して中枢神経系を抑制して鎮静作用を発揮するが、脾胃気虚による自汗・盗汗などの多汗症状に対しては止汗する。即ち、精神安定作用と滋養強壮作用があるが、酸棗仁は炒れば不眠に、生では嗜眠に効くとされる。『薬性提要』には、「心を寧んじて汗を斂め、胆虚して眠らざるを療す」とある。

【遠志】…虚弱時の不眠・動悸などの不穏症状の精神安定に用いる他、気管支の分泌粘液を軽度に排出促進させることによって祛痰に働く。『薬性提要』には、「心腎を補い、志を強め、智を益し、善忘・驚悸・迷惑を治す」とある。

【木香】…消化不良・下痢などで腹部膨満・腹痛・裏急後重などを来たすとき、消化管の蠕動運動を正常化して止痛すると共に、止瀉作用を発揮して消化機能を回復する。本方では他薬による副作用としての消化管への負担を軽減し、消化機能を低下させないための配合である。

本方は大きく分けて消化管に対する作用と中枢神経系に対する作用とに区分できる。『厳氏済生方』の原典では、思慮過度にして脾胃の障害を来たした場合に処方することになっているが、必ずしも一元的に考える必要はなく、元々脾胃気虚の人が以上のような心血虚症状を来たしたときに処方すると考えてもよい。

総じて、健忘、不眠、精神不穏、動悸などの心血虚症状が原因か、あるいはそうでなくとも脾胃気虚症状による消化吸収能低下、食欲低下、下痢などを来たしたときの薬である。

適　応

消化管無力症、慢性胃腸炎、機能性ディスペプシア、全身衰弱、食思不振、低蛋白血症、慢性反復性出血傾向、血小板無力症、不正性器出血、血尿、再生不良性貧血、鉄欠乏性貧血、遺精、不眠症、全般性不安障害、ノイローゼ、鬱状態、健忘症、老年期デメンチア、心臓神経症、自律神経失調症、月経不順、更年期症候群、神経性心悸亢進症など。

論　考

❶帰脾湯という方名の義は、**『医学入門』首巻上・釈方**に、「帰脾湯　憂思して脾を傷り、健忘・怔忡す。此れを用いて脾気を復還す」とあることに拠る。

❷本方の出典は、先ず四君子湯の出典を考慮に入れなければならず、その上で一般には『厳氏済生方』とされている。**『厳氏済生方』巻之三・健忘論治**には、「帰脾湯、思慮、制を過ぎ、心脾を労傷し、健忘・怔忡するを治す」とあって、白朮・茯神・黄耆・竜眼肉・酸棗仁・人参・木香・甘草が処方され、方後の調理として生姜・棗子が指示されている。

即ち、現在の帰脾湯から見れば、当帰と遠志が配合されていないことになる。従って、『厳氏済生方』は現在の帰脾湯の原方の出典というに留まる。

❸次に、徐用誠撰、劉純増補**『玉機微義』巻之十七血証門・補剤**には、「帰脾湯、思慮、脾を傷り、心血を統摂すること能わず、此れを以って妄行を致し、或いは吐血・下血するを治す」とあって、白朮・茯神・黄耆・竜眼肉・当帰・酸棗仁・人参・木香・甘草、及び方後の調理として棗姜も指示されている。即ち、『玉機微義』の処方は『厳氏済生方』の処方に当帰が加味されたものである。

❹更に、**『内科摘要』各症方薬**には、「帰脾湯　思慮、脾を傷り、血を摂すること能わず、血、妄行を致し、或いは健忘・怔忡、驚悸・盗汗、或いは心脾痛みを作し、嗜臥して食少なく、大便調わず、或いは肢体重痛し、月経調わず、赤白帯下し、或いは思慮、脾を傷りて瘧痢を患うを治す」とあって、人参・白朮・白茯苓・竜眼肉・酸棗仁・黄耆・遠志・当帰・木香・甘草、及び方後の調理として姜棗水煎が指示されている。

これは今日の帰脾湯と同一の処方であり、『内科摘要』の他にも**『薛氏医案』**の各処に見出される。

❺ここで、『薛氏医案』収載の帰脾湯について整理しておきたい。同書十六種の内、加味帰脾湯（110 頁）については八種を既述したので、残りの八種について、帰脾湯収載の有無と、茯神指示か茯苓かを区分して一覧表とする（**表 2**）。

❻尚、**『医便』巻三・秋月諸疾治例附**には、「帰脾湯　思慮過度にて心血を

（表 2）『薛氏医案』収載の帰脾湯

帰脾湯 / 茯苓か茯神か	有	無
茯神	保嬰金鏡録 瘍瘍機要 小児痘疹方論	保嬰粋要 原機啓微 敖氏傷寒金鏡録 外科精要
茯苓	外科枢要	

損傷し、健忘・怔忡・不寐なるを治す。此の薬、鬱結を解し、心を養い、脾を健やかにして血を生ず」とあって、白朮・白茯苓・黄芪・当帰・木香・円眼肉・人参・甘草・酸棗仁を姜棗煎服するべく指示される。『医便』は1587 年初刻であり、当時既に『内科摘要』他が著撰されていたにも拘らず、遠志を配合していない『玉機微義』方を採録しているのは、催嘔・催吐作用を嫌厭したためであろうか。

❼**『済世全書』巻之六・健忘**には、帰脾湯が掲載され、その条文の最後に、「〇神寧からずして健忘するには、酸棗・茯神・当帰を倍加し、柏子仁を加う」とあるが、煎じ薬で処方するときに参考とし得る。

❽**『祖剤』巻之三・《易簡》四君子湯**には、四君子湯を祖剤とする処方群の一つとして、「帰脾散　即ち、四君子湯加黄耆・当帰・棗仁・遠志・木香・竜眼肉。思慮過多にて心脾を労傷し、健忘・怔忡するを治す」とある。

❾**『古今名医方論』巻一・帰脾湯**には、「思慮、脾を傷り、或いは健忘・怔忡・驚悸・盗汗し、寤めて寐ねず、或いは心脾、痛みを作して嗜臥・少食・月経不調なるを治す」とあって後、「羅東逸曰く、方中竜眼・棗仁・当帰は心を補する所以也。参・耆・朮・苓・草は脾を補う所以也。立斎、遠志を加入し、又腎薬の心に通ずる者を以って之を補い、用うるに両経に腎を兼ねて合治す。而して特に帰脾と名づくるは何ぞや。夫れ心は神を蔵し、其の用は思を為す。脾は智を蔵し、其の為は意を出づ。是れ、神智思意、火土に徳を合する者也。心は営の久しきを経るを以って傷れ、脾は慮の鬱するを意うを以って傷る。即ち、母病めば必ず諸を子に伝え、子は又能く

母をして虚せしむ。必ず然る所也。其の症は怔忡・怵惕・煩躁の徴、心に見わる。飲食倦怠し、思を運らすこと能わず、手足に力無く、耳目昏眊するの症、脾に見わる。故に脾陽、苟しくも運らずんば、心腎必ず交わらず。彼の黄婆なる者、若し之に媒合を為さざるときは、已に腎、心に帰するを摂ること能わず、而して心陰は何れの頼る所、以って養うや。此れ、坎（あな）を取りて離れを塡むる者にして、必ず之を脾に帰する所以也。其の薬は一つには心陰を滋し、一つには脾陽を養い、平にして健（たけ）き者を取りては以って子を壮んにし、母を益す。然れば脾鬱の久しく、之を傷ること特に甚だしきを恐る。故に木香の辛且つ散なる者を取りて、以って気を闢（ひら）き、脾を醒ますこと有り、能く急ぎ脾気を通じて、以って心陰を上行せしむ。脾の帰する所、正に斯に在るのみ。

張璐玉曰く、補中益気と帰脾は同じく保元より出で、並びて帰・朮を加う。而して胃気を升挙し、脾陰を滋補するの不同有り。此の方は心脾を滋養し、少火を鼓動し、木香を以って諸気を調暢するに妙たり。世に木香の性は燥なるを以って用いず、之を服すれば痞悶し、或いは泄瀉・減食するを致す者多し。其の純陰無陽なるを以って、薬力を輸化すること能わざるのみ」とあって、本方は心脾両虚に対する補剤ではあっても、特に心陰を滋し、脾陽を養うのであると解説している。

❿**『医方集解』理血之剤・帰脾湯**には、「心は神を蔵して血を生ず。心傷るるときは血を生ずること能わずして血少なし。故に怔忡・健忘、驚悸・盗汗す。汗は心の液也。脾は思を主りて血を蔵す。脾傷るるときは血、脾に帰らざる故に不眠す。脾は肌肉を主る故に肌熱す。脾は四肢を主る故に体倦（つか）る。脾、運るに健やかならざる故に食少なし。脾、統血すること能わざるときは妄行し、而して吐衄・腸風・崩漏等の証有り。触るること有りて心動くを驚と曰い、驚くこと無くして自ら動くを悸と曰う。即ち、怔忡也。上気は不足し、下気は有余す。腸胃実して心気虚する故に善く忘る」と。ここでは、本方は血を脾に帰らせる薬であるという。

⓫一方、**『張氏医通』巻十六祖方**では、保元湯を祖方とする処方群の一つとして、「帰脾湯　心脾鬱結して経癸調わざるを治す」とあって、処方とし

ては保元湯加白朮・茯苓・酸棗仁・遠志肉・当帰身・桂円肉・木香・生姜・紅棗とある。尚、保元湯は「営衛の気血不足を治す」として、黄耆・人参・甘草と指示される。

⓬『**衆方規矩**』**巻之下・補益通用**には、「帰脾湯 思慮多くして脾を傷り、血を摂することなく下血・吐血・衄血等の症を見わし、或いは心虚して怔忡・驚悸・健忘する等の症を治す」とあり、加味法の最後には、「……或いは誤薬、脾を傷り、攻撃、脾を伐(う)って本病を治する便りを失う者に用いて、脾をさまして効多し」とある。ここでいう誤薬や攻撃は、今日的には消化管に対する副作用と理解し得よう。

⓭『**新増愚按口訣**』**上巻・帰脾湯**には、「○愚按ずるに、脾は意を蔵する故に思慮するときは脾を傷る也。夫れ脾は臓腑の本にして栄衛の主也。経に曰く、脾は至陰也。故に血を主る。脾傷るるときは血を摂すること能わずと云う者、是れ也」とあって、この条文は『厳氏済生方』以来の「思慮過ぎて脾を傷る」という今日の心身症症状の記述である。

一方、「○心脾は子母也。子病むときは母従いて病む也。先ず脾を傷りて則ち心に伝えて、健忘・怔忡の者に之を用ゆ」とあって、今度は前とは逆に「脾を傷りて健忘・怔忡する」場合にも適応となる旨が記されている。

そこで著者が**解説**で述べたように、本方では脾胃気虚症状と心血虚症状とは因果関係が有っても無くても、両者が併存していれば投与することができる。

⓮『**牛山方考**』**巻之下・帰脾湯**には、「婦人、姑に得られず、男に寵せられず、思念遂げず、嫉妬愠怒する類の者」と云う、我が国独特の家族事情による嫁の立場に有りがちな状況に処方して、「其の効神の如し」と言う。

⓯『厳氏済生方』、『玉機微義』では茯神が処方され、『薛氏医案』では茯神か茯苓か何れかが処方されている。しかし、抑々茯神と茯苓と区別する必要があるのであろうか。多紀元簡著『医賸(イショウ)』には、「茯苓・茯神は原是れ一物なり。別録は強いて之を判ずるのみ。史記亀策伝は茯霊に作る。乃ち神・霊の二字互用す。広雅は茯神、茯苓也と。太平御覧は本草経を引きて茯苓、一名茯神と。証と為すべき也。屈大均云う、茯は伏也。神、土中に

伏して苓と為す。故に茯苓と曰う。苓は霊也。神能く伏するときは霊。蓋し此に見有り。大洲太田子通澄元に茯苓弁有り。甚だ明確為り」とあって、元簡は茯苓・茯神の区別を無用としている。

⑯矢数道明先生は、**『漢方と漢薬』第四巻第一号・帰脾湯の運用に就いて**で、「乱雑なる本方の主治を更に検討して見ると、本因と末因とを発見する。即ち本因として挙ぐべきは脾虚と心血の虚である。末因としては即ち思慮憂思である。即ち本方運用の患者は、元来体質虚弱のもので、特に身心過労の結果、精神肉体共に疲労困憊の極に達し、その結果上下出血止むことなく、極度の貧血状態を現わし、或は健忘症となり、怔忡驚悸等神経の興奮状態を惹起し、不眠症、食慾全く不振し、或は大小便不調となり、婦人は経候不順等をなすのである。瘰癧流注の虚証に用ゆるは本方がよく脾を補い食慾を進め、造血作用を促進し、内托の効を賦与せんがためである」と詳しく解説されている。

⑰また、矢数先生は**『漢方と漢薬』第六巻第三号・後世要方解説・帰脾湯**で、本方の応用として、「（一）諸出血。吐血・衄血・下血・溺血・崩漏等にて貧血甚だしく、心動悸・食慾不振を訴えるもの。（二）健忘症。思慮過度、或いは大病後精気虚脱して健忘するもの。（三）不眠症。身心過労の結果、不眠症を発し、その人貧血し、元気甚だしく衰えたるもの。（四）食慾不振。全身衰弱者にして他の補剤を服して反って胃に泥むものにはこの方よし。（五）婦人月経不順。全身衰弱によるもの、思慮過度による月経不順によし。（六）瘰癧。荏苒愈えず、稀膿出づるもの。（七）遺精・白濁・淋渋、皆虚証のものに用ゆ。（八）ヒステリー。貧血性のものに効あることあり。（九）頭上白屑。虚熱上衝によるもの、足冷あり。（十）陰門熱痒、媾交時出血等の証」と、多方面に亘って記載される。

⑱山本巌先生は**『東医雑録』(1)・血証について**で、帰脾湯について、「私は本方を使用するのは、大量出血により気虚がおこり、顔面蒼白・息切れ・心悸亢進・脳貧血・耳鳴り・眼前暗黒などの場合に用いるのが最も多い。即ち止血よりも、貧血の自覚症状の改善に用いるのである。……出血でなくとも、不眠・心悸・健忘などのノイローゼの患者で、血色の少ない、食

欲不振、元気のない気虚の者に用いる。思慮多くして脾を傷り、……と書いてある通り、ノイローゼのため、脾の働きがおとろえることもあるが、非常な心配、心の葛藤で血を吐く思いの胃潰瘍の出血などには黄連・山梔子のような心熱を降す方がよく効く。このときは出血も鮮紅色、顔色も赤い。血小板減少性紫斑病によいといわれるが、特発性のものにはほとんど無効のようである。むしろ止血だけならば芎帰膠艾湯がよく効く場合が多い。また遠志で嘔気をおこすことがよくある。子供に多い」と述べられている。

⑲また、先生は『**東医雑録**』**(3)・補中益気湯の臨床応用**でも、帰脾湯について、「昔は姑に気に入られずに悩み、夫に愛されず、寡婦や箱入娘の恋わずらいといったような精神的ストレスに対する鎮静効果と、その悩みのため、食欲なく、栄養障害・体力低下・気力の低下をきたしたものに用いる方剤である点が、四君子湯、補中益気湯と異なるところである。イライラしたり、腹が立ったり、熱が出る者には柴胡・山梔子を加えて用いる。以上とは正反対に、老人ぼけに用いる。健忘症といわれるが、私は主に老人ぼけに用いる。テレビを見ながら居眠りをし、夜は一睡もしない。食事をしながら口に食べ物を入れて眠ったり、そのくせ眠れないという。自分の住所、姓名も忘れ、家族や兄弟も忘れる。一～二時間前に食事をした事も忘れる。こうした場合は、四君子湯や補中益気湯に丁香と木香を加えて用いる。帰脾湯には、丁香は入っていないが木香が入っている」と解説されている。

⑳著者は87歳男性で、脳梗塞後遺症、左内頸動脈狭窄症(80%)、多発性骨髄腫でヘモグロビン7.5g/dl前後の患者さんを在宅診療として担当した。当初は慢性脳貧血症状を呈していて、常に輸血も考慮していた。その自覚症状を目標に帰脾湯を処方したところ、ヘモグロビンは不変であるが、自覚症状の訴えが解消した症例を経験している。